

Buddhacarita における「四門出遊」

村 上 昌 孝

1 文献としての二つの性格——仏伝と mahākāvya——

仏伝は、Buddha が歴史的な存在であることをやめた後、年月をかけて仏教徒たちによって形作られ、我々の知るものに発展していったと見なされている。仏伝を構成する要素の中には、Buddha の実際の言行に由来するものもあるだろう。同時に、仏伝の形成に関わった人々の様々な意図により、新たに付け加えられた要素があることも、十分に考えられる。例えば、自分の信仰に基づき、Buddha を特別の存在として描こうとする人々は、Buddha の超人性を印象づけるような要素を付加したであろう。しかし、仏伝に新たな要素を付加する動機は、信仰心ばかりではあるまい。物語または文学作品としての側面を重視する人々ならば、作品としての効果を高めるための付加も行なったに違いない。Aśvaghōṣa (2世紀) の *Buddhacarita* (BC) は、まとまった仏伝としては古層に属するが、これを扱うには、文学作品としての側面を無視する訳にはいかない。

BC のサンスクリットテキストの各章の末尾には、この作品が mahākāvya であることが記されている。例えば、第1章の末尾は、次のとおりである。

iti buddhacarite mahākāvye bhagavatprasūtir nāma prathamah sargaḥ //
1 //⁽¹⁾

以上が、『ブッダチャリタ=マハーカーヴィヤ』における、尊い方の誕生

(1) E. H. Johnston, *Aśvaghōṣa's Buddhacarita or Acts of the Buddha*, Lahore, 1936 (New Enlarged Edition, Delhi, 1984), Part I—Sanskrit Text, p. 11.

という名前の第1章である。

サンスクリットテキストの常として、この種のコロフォンが Āsvaghoṣa 当時に遡り得るかどうかははっきりしない。BCの現存テキスト自体には、mahākāvya ないし kāvya という語の用例はない。しかし、同じく Āsvaghoṣa の作である *Saundarananda* (SN) では、この作品が kāvya として制作されたことが明記されている。BCも、少なくとも kāvya として制作されたことは、まず疑いない。BCの、一般的に使用されるテキストの校訂者である E. H. Johnston は、Daṇḍin (7世紀)の修辞学書 *Kāvyaḍarśa* 1.14-19 に言及している⁽²⁾。そこでは、mahākāvya を次のように定義する。

sargabandho mahākāvyaṃ ucyate tasya lakṣaṇam /
āśīr namaskriyā vastunirdeśo vāpi tanmukham // 14 //
itihāsakathodbhūtam itarad vā sadāśrayam /
caturvargaphalāyattaṃ caturodāttanāyakam // 15 //
nagarārṇavaśailartucandrārṅkodayavarṇanaḥ /
udyānasalilakrīḍāmadhupānaratotsavaḥ // 16 //
vipralambhair vivāhaiś ca kumārodayavarṇanaḥ /
mantradūtaprayāṇajināyakābhyaudayair api // 17 //
alaṃkṛtaṃ asaṃkṣiptaṃ rasabhāvanirantaram /
sargair anativistīrṇaiḥ śravyaṅvṛttaiḥ susaṃdhibhiḥ // 18 //
sarvatra bhinnavṛttāntair upetaṃ lokarāñjanam /
kāvyaṃ kalpāntarasthāyī jāyate sadalaṃkṛti // 19 //

章による著作がマハーカーヴィヤと言われる。その特徴〔は、以下のとおり〕である。祈願、敬礼、或いはまた、主題の紹介がその（マハーカーヴ

(2) *op. cit.*, Part II, p. lxiii.

(3) Vidyābhūṣaṇa Pandit Rangacharya Raddi Shastri (ed), *Kāvyaḍarśa of Daṇḍin*, Second Edition, Poona, 1970, pp. 15-23.

イヤの)冒頭である。(14)

歴史書中の物語から生じたもの、或いはそれ以外が、常に〔マハーカーヴィヤの〕拠り所である。〔即ち、人生の〕4目的の成果に従属するもの、器用で高潔な主人公を伴うものが。(15)

町・海・山・季節・月や太陽の上昇の描写や、遊園や水中での遊び・酒を飲むこと・合歓の楽しみを伴う。(16)

諸々の別離、また、諸々の結婚、子供の誕生の諸々の描写、更に、政策協議・使節・出征・戦闘・主人公の成功を伴う。(17)

文飾され、簡略にされてはおらず、情調と感情に関して隙間がない。過度に長くなく、韻律が聞くに値し、よく関連している諸々の章を伴う。(18) あらゆる所で別々の韻律で終わる。〔このような〕カーヴィヤは、人々を楽しませ、別の劫まで存続する。立派に文飾されたものは。(19)

この定義がそのまま、Aśvaghōṣa の理解する mahākāvya であったとは言い難い。しかし、Aśvaghōṣa の時代にも、ある程度に修辞学が発展していたことが、例えば、同時代の西インドのサンスクリット碑文などからも窺われる。⁽⁴⁾ また、BC 自体が様々な学芸や意匠を扱い、文章技巧を凝らしている。これらから考えて、Aśvaghōṣa の目指していた mahākāvya は、Daṇḍin が定義するものとは、さほどの相違はないであろう。

さて、*Kāvyaḍarśa* 1.15 に出てくる caturvarga を「〔人生の〕4目的」と訳した。人生で達成すべき目的を3種または4種と見なし、それぞれ trivarga, caturvarga と呼ぶことは、Aśvaghōṣa の頃には一般的になっていた。trivarga は、dharma (各自の境遇に応じた道徳的義務)、artha (財産・地位・名誉などの世俗的成功)、kāma (欲望、とりわけ愛欲の充足) から成る。caturvarga は、これらに mokṣa (解脱) を加えたものである。BC も、mahākāvya であ

(4) Śāka 族の王 Rudradāman 1 世の Junāgarh 碑文 (150 a.d.) 14行目には、優れた文章が具えるべき要件が列挙されている。これは、Daṇḍin が *Kāvyaḍarśa* 1.41 で Vidarbha 体と称する文体の特徴として挙げている10種の要件と、かなり類似している。cf. D. Ch. Sircar, *Select Inscriptions bearing on Indian history and civilization*, Vol. I, Delhi, 1991, p. 179.

る以上は、これらの描写が欠かせない。

BCの現存テキストでは、*caturvarga* という語は見当たらず、*trivarga* の用例のみである。また、*dharma*, *artha*, *kāma* が並列されている箇所もいくつかあるが、そこには *mokṣa* は加わっていない。しかし、*mokṣa* については Buddha の出家後の追究の対象として描かれている。BCが *trivarga* という考え方に立つことは確かだが、仮に、二大叙事詩と同様に、*caturvarga* という考え方が併存しているとしても、支障はない。

BCが仏典である以上、多くの箇所では、*dharma* という語は、世俗生活を離れた修行者が獲得の対象とする、あるいは、Buddha が獲得した真理を表す。それと共に、世俗生活の中で履行されるべき、個々人に課せられた道徳・義務を意味する場合も多い。具体的には、Buddha の父である Śuddhodana の善政として、第2章で具体的に描かれる。

artha という語が世俗的成功の意味で用いられている用例は、BCに散見する。先程挙げた Śuddhodana の善政は、*dharma* のみならず *artha* の具体的な描写でもある。王が内政と外交とを通じて行なう *dharma* は、同時に、自己の *artha* の実現でもあるからである。その意味では、*purohita* の息子である Udāyin が、老・病・死に悩む Buddha の関心を愛欲に向けさせようとして行なう説得 (BC 4.63-82) も、*artha* の描写のうちに挙げられる。Udāyin は、BC 4.62 で *nītiśāstrajña* 「ニーティシャーストラを知る者」と形容されている。この *nītiśāstra* は、*arthaśāstra* とほぼ同じ意味で用いられているからである。

さて、*kāma* については、Buddha の出家以前の生活の中で扱わざるをえないのだが、主人公が Buddha であるだけに、Aśvaghōṣa も苦心したところであろう。最終的に、BCでは、いわゆる四門出遊に相当する箇所とその直後で、*kāma* の描写がなされる。その際に、*mahākāvya* としての文学的要請によって、仏伝に新たな要素が付加されていないだろうか。本論文では、そのような観点に立って、BCの「四門出遊」のエピソードを検討する。

2 *Buddhacarita* と *Saundarananda*

Āsvaghoṣa の kāvya 作品としては、*BC*、*SN* 以外には、*Śāliputrāprakaraṇa* が現在まで残っている。*BC* と *SN* は、共に韻文作品で、コロフォンで mahākāvya と呼ばれ、まとまった分量が伝えられている。それに対し、*Śāliputrāprakaraṇa* は戯曲であり、中央アジア出土のごく一部の写本断片しか残されておらず、仏伝と直接関係するかどうかは分からない。

BC は、Buddha の生涯全体を主題にしていたものと思われるが、サンスクリット写本で真作と認められている部分に描かれているのは、Buddha の誕生から成道の途中までである。*SN* は、Buddha の異母兄弟で、後に Buddha の許で専門修行者となった Nanda が、妻への恋慕の気持ちを断ち切り、志操堅固な修行者となるまでを扱っている。その前段階として、Kapilavāstu の町の建設から、そこに誕生した Buddha が自分の教えを人々に広めるまでが語られる。

BC と *SN* の仏伝部分を比較すると、一方で詳細な描写がなされている場面は、もう一方では簡略に片づけられるという傾向がある。王宮を出て求道生活に入る以前の Buddha (Sarvārthasiddha) が、老・病・死を免れることができないことを知って苦悩する部分は、*BC* で詳しく、*SN* ではごく短い。Buddha が、前者では主人公、後者では脇役である以上、当然の扱いと言える。

さて、*SN* では、「四門出遊」のエピソード自体に触れていない。また、出家の場面は、*SN* 2.65 で、ごく簡単に述べられるにとどまる。

udvegād apunarbhavē manah praṇidhāya
sa yayau śāyitavarāṅganād anāsthah /
nīsi ṅṅpatinilayanād vanagamanakṛtamanāḥ
sarasa iva mathitanalināt kalahaṃsah⁽⁵⁾ //

(5) E. H. Johnston (ed.), *The Saundarananda of Āsvaghoṣa*, London, 1928, p. 16.

動揺故に、非再生に心を定め、かの者（サルヴァールタシッダ）は、関心を有さずに、出立した。寝ている優れた女たちのいる、人々の主の住居から、夜中に、森へ行くことに決心をして。攪拌されて濁った湖から、カラハンサが〔出立する〕ように。

BCでは *kāma* の詳細な描写が行なわれる場面が、SNではこのように簡略化されているのには訳がある。*kāma* への耽溺と克服は、Nanda に負わされた役割だからである。例えば、SN 2.63 では、次のように言う。

tatas tayoh saṃskṛtayoh krameṇa
narendrasūnvoḥ kṛtavidyayoś ca /
kāmeṣv ajasraṃ pramamāda nandaḥ
sarvārthasiddhas tu na saṃrarañja //⁽⁶⁾

それから、順序に従って通過儀礼を執り行われ、また、学問を修了した、かの、人々の長の息子2人のうち、ナンダは、諸々の愛欲の対象に、常に気も漫ろだった。一方、サルヴァールタシッダは、〔愛欲の対象に〕執着しなかった。

以降、Nanda の妻との愛の楽しみ（第4章）、天界の *apsaras* たちに心を動かされる様子（第10章）などが、詳細に物語られる。

一方、BC において、出家前の Buddha が *kāma* に関する記述は、BC 2.28-32 に僅かに見られる。

kiṃcin manaḥkṣobhakaraṃ pratīpaṃ
kathaṃ na paśyed iti so 'nucintya /
vāsaṃ nṛpo vyādiśati sma tasmai

(6) *ibid.*

harmyodareṣv eva na bhūpracāram // 28 //
 tataḥ śarattoyadapāṇḍareṣu
 bhūmau vimāneṣv iva rañjiteṣu/
 harmyeṣu sarvatusukhāśrayeṣu
 strīṇām udāir vijahāra tūryaiḥ // 29 //
 kalair hi cāmīkarabaddhakakṣair
 nārīkarāgrābhīhatair mṛdaṅgaiḥ /
 varāpsaronṛtyasamāis ca nṛtyaiḥ
 kailāsavat tadbhavanam rarāja // 30 //
 vāgbhiḥ kalābhir lalitaís ca hāvair
 madaiḥ sakhelair madhuraiís ca hāsaiḥ /
 taṃ tatra nāryo ramayāmbabhūvur
 bhrūvañcitair ardhanirīkṣitaiís ca // 31 //
 tataḥ sa kāmāśrayapaṇḍitābhiḥ
 strībhir gṛhīto ratikarkaśābhiḥ /
 vimānapṛṣṭhān na mahīm jagāma
 vimānapṛṣṭhād iva puṇyakarmā // 32 //⁽⁷⁾

「僅かでも心の動揺をもたらす、不快なものを、どのようにであれ、〔王子が〕見ないように」と考えて、かの、人々の守護者（シュッドーダナ）は、かの者（王子）に、諸宮殿の内部にのみ居住することを命じ、地上に出歩くことは〔命じ〕なかった。(28)

それ故、秋の雲のように白い、大地に固定された天界の車のような、あらゆる季節の楽しみのはり所である諸宮殿に、女性たちの高尚な楽器〔の演奏〕と共に〔王子は〕暮らした。(29)

例えば、甘美な〔音を発し〕、黄金によって胴を締めつけられた、女性た

(7) *op. cit.*, Part I, pp. 15f.

ちの手先によって叩かれたムリダンガ太鼓によって、また、美しいアプサラスの踊りと同様な踊りによって、かの者（王子）の住居は、カイルーサのように見えた。(30)

甘美な言葉によって、また、愛らしい仕草によって、戯れ半分の酔態によって、そして、甘美な笑いによって、そこ（宮殿）で、女性たちは、かの者（王子）を楽しませた。眉を顰めることや、半分見詰めることによって。(31)

それ故、かの者（王子）は、愛欲の拠り所〔である手練手管〕に精通し、性的快楽に疲れを知らない女性たちによって捕らえられ、宮殿の最上階から地上へは行かなかった。めでたい行為をする者が、天の車の上から〔地上へは行かない〕ように。(32)

Buddha が主体的に kāma に関わるというよりは、周囲の女性たちの手練手管のせいであらわされているという印象を受ける。また、Śuddhodana の考えは、「四門出遊」のエピソードの伏線となっている。

3 「四門出遊」エピソードの構成

Buddha が、老・病・死を人生における最重要な問題として捕らえていたことは、多くの仏典から窺われる。ただ、これら 3 者をいつごろから問題視し始めたかについては、古い仏典には見えないようである。これらの苦に思いを致していなかった Buddha が外出し、老人・病人・死者を見て強烈な衝撃を受けるといふエピソードは、劇的な効果を狙った仏典の作者が創作したものであろう。

このエピソードは、最終的には「四門出遊」と呼ばれることになる。しかし、Buddha が四つの門から外出し、それぞれ、老人・病人・死者・修行者を見るというのは、そもそもの形ではなかったようである。

『大正新脩大蔵經』（『大正蔵』）本縁部に納められている仏伝の多くでは、東・南・西・北の門を出た Buddha が順番にこれら 4 者を見ている。ただし、

老人と病人の順番が入れ替わっている経典が3種あり⁽⁸⁾、うち、『異出菩薩本起經』では、病人がさらに「病疾人」と「熱病人」とに分けられて、修行者は登場しない。また、『仏本行經』では、最初に「出宮城門」と記されるだけで、4回の外出の際に違う門を通る記述はない。また、本縁部ではないが、『五分律』では、西城門を出た Buddha が、死者を見た帰りに修行者に会っている⁽⁹⁾。これらから見て、老人・病人・死者の3者が本来の形で（ただし、老人と病人との順序については分からない）、後に修行者が付け加えられたことが分かる。

さて、BCでは、これら4者が連続して出てくるので、一見すると、「四門出遊」エピソードの最終段階に属するかのようである。しかし、BCでは、それぞれ別の門から外出したとは書かれていない。また、修行者が出てくるのは、通常、「四門出遊」とは別のものとして扱われるエピソードの中である。第5章において、Buddha は騎乗の人となり、農耕で殺された小生物たちを哀れんだ後、jambū 樹の下で prathama dhyāna（最初の瞑想境、初禪）に入る。この時、修行者が Buddha に近づくのである。BC 5.12-16 では、次のように言っている。

kṛpaṇaṃ bata yaj janaḥ svayaṃ sann
avaśo vyādhijarāvināśadharmā /
jarayārditam āturaṃ mṛtaṃ vā
param ajñō vijugupsate madāndhaḥ // 12 //
iha ced aham īdṛṣaḥ svayaṃ san
vijugupseya paraṃ tathāsvabhāvam /
na bhavet sadṛṣaṃ hi tat kṣamaṃ vā
paramaṃ dharmam imaṃ vijānato me // 13 //
iti tasya vipaśyato yathāvaj

(8) 『太子瑞應本起經』（『大正藏』3, pp. 474b-475a）、『異出菩薩本起經』（『大正藏』3, pp. 618b-619a）、『仏本行經』（『大正藏』4, pp. 64a-66a）の3種。

(9) 『大正藏』22, pp. 101b-102a.

jagato vyādhijarāvīpattidoṣān/
balayauvanajīvitapravṛtto
vijagāmātmagato madaḥ kṣaṇena // 14 //
na jaharṣa na cāpi cānutepe
vicikitsām na yayau na tandrinidre /
na ca kāmagaṇeṣu saṃrarañje
na vididveṣa paraṃ na cāvamene // 15 //
iti buddhir iyaṃ ca nīrajaskā
vavṛdhe tasya mahātmano viśuddhā /
puruṣair aparair adṛṣyamānaḥ
puruṣaś copasasarpa bhikṣuveṣaḥ // 16 //

「ああ、哀れなものだ。人は、自らは無力で、病気・老齢・滅亡を定めと
していながら、

無知で、驕り故に盲目なので、老齢に襲われ、〔病気に〕苦しみ、或いは、
死んだ他者を忌み嫌っているのだから。」(12)

「もし、この世において、私が、自らこのようでありながら、同様な本性
を有する他者を忌み嫌うならば、それは、最高の理法をこのように知って
いる私にとって、まさに似つかわしくないし、また、可能でもない。」
(13)

このように、人々の病気・老齢・死という害悪を適切に考えつつある、か
の者（ブッダ）の、体力・若さ・生命から生じ、心に存在していた驕りは、
瞬時のうちに消え去った。(14)

喜びもせず、更にまた、苦しみもしなかった。疑いにも赴かなかつたし、
怠惰・睡眠にも〔赴か〕なかった。また、愛欲の諸長所にも執着せず、嫌
いもしなかった。そして、他者を軽蔑しなかった。(15)

以上のような、この、汚れがなく清らかな覚りが、偉大な心をもつ、かの

(10) *op. cit.*, Part I, pp. 46f.

者（ブッダ）のものとして成長した。そして、他の人々によって見られずに、乞食者の衣服を着た人が近づいた。(16)

ここでは、病氣・老齡・滅亡と、体力・若さ・生命とを相対と見なす考えが克服された後、修行者が登場する。通常の「四門出遊」にはない記述であり、Aśvaghōṣa が一応それを知りながらも、老人・病人・死者と修行者との間に一線を画そうとしていたことが窺われる。

4 「四門出遊」における女性の嬌態

BCにおいて、女性の描写は多々あるが、特に kāma に関わりがあるものは、「四門出遊」とその直後に集中する。BC 3.12-24 では、生まれて初めて外出する Buddha を見ようと、女性たちが屋敷の最上階の窓に群がるが、その中には情交の跡を連想させるような記述も見られる。また、BC 4.1-53 では、死者を見たにもかかわらず無理やり遊園に連れて来られた Buddha を、遊女たちが様々な言動を用いて誘惑しようとする。これらをどう捕らえればよいか。

前者に出てくる女性たちは、路上の Buddha とは空間的にも心理的にも距離があり、直接関わりようがない。また、後者は、人の老・病・死を初めて目の当たりにして強い衝撃を受けている Buddha に対する誘惑の試みだから、実現の可能性がない。老・病・死を免れない男女間における kāma の充足に、Buddha は全く興味を示さなくなっているのである。そのことは、BC 4.96-99 の, Udāyin に対する Buddha の反論の締めくくりに、端的に示されている。

tad evaṃ sati duḥkhārtam jarāmaṇabhāginam /
na mām kāmeṣv anāryeṣu pratārayitum arhasi // 96 //
aho 'tidhīraṃ balavac ca te manaś
caleṣu kāmeṣu ca sāradaśīnaḥ /
bhaye 'titīvre viṣayeṣu sajjase

nirīkṣamāṇo maraṇādhvani prajāḥ // 97 //

ahaṃ punar bhīrur atīvaviklavo

jarāvīpadvyādhibhayaṃ vicintayan /

labhe na śāntiṃ na dhṛtiṃ kuto ratiṃ

niśāmayan dīptam ivāgninā jagat // 98 //

asaṃśayaṃ mṛtyur iti prajānato

narasya rāgo hṛdi yasya jāyate /

ayomayīm tasya paraimi cetanām

mahābhave rajyati yo na roditi // 99 //

それ故、そのようであるから、苦によって悩まされ、老齡と死を運命付けられている私を、諸々の尊くない愛欲の対象に、[あなたは] 迷い込ませるべきではない。(96)

ああ、諸々の移ろいやすい愛欲の対象に味わいを見出すのだから、あなたの心は、あまりにも堅固で、また、力強い。あまりにも激しい恐怖のうちで、諸々の〔感官の〕対象に、[あなたは] 執着している。人々が死出の旅路にいるのを見ているのに。(97)

一方、私は、老齡・死・病氣故の恐怖を考えているので、恐がり、ひどく動揺している。平静さを〔私は〕得ていない。意志堅固さを〔得てい〕ない。何故、快樂を〔得られようか〕。人々が火によって燃えているかのようであるのを見ているのに。(98)

「死は疑いない」と知りながら、その心の中に恋心が生じる、その者の心は鉄で出来ているのだと、〔私は〕理解する。大きな恐怖のうちで、嘆かず、恋心を抱く者の〔心は〕。(99)

他に、Buddha の出家を何とか食い止めようとして、Śuddhodana がその周囲に侍らせた女性たちが眠り込んでしまう記述が BC 5.47-62 にある。ここで

(11) *op. cit.*, Part I, pp. 42f.

も男女の抱擁や性交を連想させる箇所があるが、出家を決心した Buddha にとっては、これは単なる醜態に過ぎない。BC では、Buddha が主体的に kāma の楽しみを充足させない形で、kāma の記述を行なっている。

Āsvaghoṣa は、BC において、仏伝を mahākāvya の形で著すことを目指した。しかし、kāma への執着を厭う立場にあるべき仏伝と、kāma の充足を表現しなければならない mahākāvya との間には、矛盾が生じる。これは、SN の場合も同様で、結びにあたる SN 18.63-64 には、わざわざ次のように記されている。

ity eṣā vyupaśāntaye na rataye mokṣārthagarbhā kṛtiḥ
śrotṅnām grahaṇārtham anyamanasām kāvyopacārāt kṛtā /
yan mokṣāt kṛtam anyad atra hi mayā tat kāvyadharmāt kṛtam
pātum tiktam ivausadham madhuyutaṃ hṛdyam katham syād iti // 63 //
prāyeṇālokyā lokam viṣayaratiparam mokṣāt pratihatam
kāvyavyājena tattvaṃ kathitam iha mayā mokṣaḥ param iti /
tad buddhvā śāmikam yat tad avahitam ito grāhyam na laliṭam
pāṃsubhyo dhātujebhyo niyatam upakaram cāmīkaram iti // 64 //

このように、楽しみのためではなく寂靜のため、解脱の実態を内包する作品が、〔仏教とは〕別の考えをもつ聞き手たちの掌握のため、カーヴィヤという手段によって制作された。まさにここで、私によって作られた、解脱以外のものは、カーヴィヤの定め故に作られたのだ。「どうにかして、感じのよいものとなるように」と、飲ませるために蜜と合わされた、苦い薬のように。(63)

概して、人々が〔感官の〕対象の楽しみに専らで、解脱から追い払われていると見て、カーヴィヤという見せかけによって、ここで、私は、真実を物語った。「解脱は、最高である」と。それを理解して、戯れではなく、

(12) *op. cit.*, pp. 141f.

寂靜に関連して言われたことを、ここから取るべきである。鉞物から生じる諸々の塵から、⁽¹³⁾ 確固たる有用な黄金を〔取る〕ように。

BCのサンスクリット写本の真作部分では、結びにあたる部分は失われているが、漢訳『佛所行讚』には、次のようにある。

讚諸牟尼尊 始終之所行 不自顯知見 亦不求名利 隨順佛經說 以濟諸
世間⁽¹⁴⁾

聖者たちの最初から終わりまでの行いを称えるのは、〔作者〕自ら知見をひけらかすためではなく、また、名利を求めめるためでもない。ブツダの教えに従い、それによって人々を救うためなのだ。

しかし、わざわざこのように記すということは、自分の作品を、仏伝としてはもちろん、mahākāvyaとしても読者に認めて欲しいと、Aśvaghoṣaが意識していることを意味する。

『佛所行讚』では、一般に言われるほど恣意的なテキストの増減は行われていない。確かに、サンスクリットの韻文一つに対して、翻訳では5言2句から10句くらいのばらつきがある。また、韻文二三をまとめて翻訳することもある。しかし、概ね、原文と翻訳との対応関係ははっきりしている。ただ、kāmaに関する記述は例外である。BC 3.12-21, 4.29-53, 5.53-62 は、それぞれ12句、12句、14句で訳され、しかも、内容に相当の開きがある。訳者の曇無讖が、仏伝としては異質な（即ち、mahākāvyaとしては存在が要求される）要素に気付き、原作の流れを損なわない範囲で、可能な限り省筆したことが、容易に想像できるのである。

(13) cf. *op. cit.*, p. 163.

(14) 『大正蔵』4, p. 54c.